永観三年二月十三日

――曾禰好忠の「円融院のおほん子の日の日召なくて参りたりとてさいなまれて又の日奉りける」という詞書に始まるつらね歌の背景と曾丹集でのそのつらね歌の掲載位置についての一作業――

熊本守雄

中古三十六歌仙の一人である曾禰好忠・通称曾丹の私家集『曾丹集』の後半の、組織の乱れと思われる個所の背景を時間的に考察して、そこから流布本曾丹集の成立時期の問題にまではいっていきたい。

曾丹集は大きく毎月集（三百六十首歌）・百首和歌・源順の返しの百首の三部、及びその他から成っている。

その他にはいるものの一つに、「円融院のおほん子の日の日召なくて参りたりとてさいなまれて又の日奉りける」という詞書に始まる「つらね歌」数首がある。それは曾丹の百首和歌と「源順これを見て返し志たりとなむ」の書き出しに始まる順の百首との間におかれている。

このつらね歌の置かれている位置をどう解釈するかが、作業の中心課題である。

一

池田亀鑑博士の一論文にみえる一節を、このつらね歌の位置についての解釈の一例とみなして、この作業を進めていく。

池田博士は昭和九年八月の『文学』（第二巻第八号）に「曾禰好忠についての疑問」なる論文を書いておられる。その中で「…右の記事（注、今昔物語巻廿八第三、円融院御子日参二曾禰吉忠一語にみえる好忠の言動についての記事）を信ずれば、好忠は権門に対し、自己を主張してゆづらない悲劇的な英雄の性格さへ持ってをり、今日の波瀾を予想し、その当然導かれる筈の結末を覚悟して、わざと下賤の服装のまま、単身敵地に乗込んだものと解せられるが、事実は果してさうであったであらうか。子の日の一件は決して作り物語ではなく、たしかにあった事実に相違ないことは好忠自らも曾丹集に於て、「円融院のおほん子の日の日、召なくてまゐりたりとてさいなまれて又の日奉りける」と詞書をして、

よさの海うちとの浜はうらさびて浮世を渡る天の橋立

橋立と名は高砂の松なれど身はうし窓による白波

白波のたづきありせばすべらぎの大宮人となりもしなまし

しなましの心にかなふ身なりせば何をかねたる命とかふる

その他四五首を残してゐる事によって明らかである。是等の歌に対しては、源順も同情して返歌したやうであるが（傍点筆者）、丹後椽といふ低い身分の、しかも藤氏一族には縁故もなく、栄達を図らうにも何のたづきもない孤独の天才が、死なましとまで悲しんだからには相当なことがあったであらう。…」と述べた箇所がある。傍点を施した所、「是等の歌に対しては、源順も同情して返歌したや

うであるが」なる記述に注目したい。

博士のこの記述によると、曾丹の百首和歌の他に、例の「円融院のおほん子日の日…」云々の詞書に始まるつらね歌をも含めて、源順が返歌した。即ち順が曾丹のこの日の災難に同情したことを返歌の一要素・動機としてまでみておられるらしい。少なくとも曾丹の百首和歌、子の日のつらね歌、順の返しの百首の三つを時間的に一直線のこととして受け取っておられる。時の流れのとおりに歌が配置されていると理解しておられる。そのために前のような想像的断定の言葉がはいったものと推察される。確かに、曾丹集のこうした歌の並びをそのまゝ受け取ったら、池田博士のような想像も可能である。それに源順が好忠に返しの百首を贈るというからには、何か理由・動機があると考えるのが自然で、そう考えた場合、好忠がさいなまれたことに同情して贈ったのだろうと考えをもってきやすい。

二

しかし曾丹の百首和歌と源順の百首和歌とにおける歌の配列・構成・歌の数などを検討したり、この事件が起きた日はいつだったかを確かめたり、あるいは源順の生歿年等を検討していけば、池田博士のような「是等の歌に対しては、源順も同情して返歌したやうであるが」といった類の想像をはさむことができなくなる。

曾丹集の組織を群書類従及び続国歌大観本についてみていくと、まず総序がある。これは毎月集の序とも思われるものである。そして続国歌大観番号二二〇四五番の序歌ともいえる短歌がこれに続いている。その後に、正月、春のはじめ、の二二〇四六番「三島江に角ぐみ渡る蘆のねの一夜計に春めきに見」に始まる三百六十首の毎月集がある。この毎月集は、一年十二ヵ月、ひと月を上・中・下の三つに分けて、三十六項を設け、各項各々十首で、計三百六十首からなっている。しかしこの毎月集には、最初に序ならびに短歌一首を置いていたように、夏・秋・冬の初め、即ち四月・七月・十月の初めには、それぞれ長歌一首と反歌一首を、三百六十首とは別に、付しているから、それを勘定に入れると、三百六十首を超える。

この毎月集の次には、曾丹の百首和歌が置かれている。この組織をみていくと、まず序があり次いで春十・夏十・秋十・恋十と題する歌が続いているが、実際は春十には十一首ある。だが前の毎月集と照合して考えると、一首は序の歌とみなせる。ついで「此は此天の下の神代より人の心の浅き影さへ著き山の井にみ東ことよせじ難波づに咲きて匂へる花と多くの人の口に覚ゆる事を記したるなるべし」といった詞書に始まる三十一首の沓冠の歌がある。その後に「きのえ」「きのと」といった十干をよみこんだ歌が十首あり、更に一日めぐり、一夜めぐり各一首、次に「ひんがし」「たつみ」といった方位をよみこんだ八方位の歌が八首ある。だから「百首和歌」とあっても、百二首あることになる。

毎月集・百首和歌の次には、「恋しさを慰めがてら試に返してみばやせながゆをも」に始まる四首のつらね歌がある。その次に例の「円融院のおほん子日の日」云々という詞書に始まる四首のつらね歌があり、次に一首を挟んで別のつらね歌四首がある。

こうしたつらね歌のあとに、源順の返しの百首がある。それは「源順これを見て返し志たりとなむ」という詞書きに始まるものである。前記した池田博士のような想像は、こうした配列になっている上に、「…これを見て…」となっているところから、生じたものであろう。ところで、そうすると、百首和歌及びいくつかのつらね歌をふまえた形を、源順の返しがとっているかとみれば、そうではない。源順の百首は、曾丹の百首と同様に、まず序を付しており、次いで春十・夏十・秋

十・冬十・恋十がある。しかし秋十には九首しかなくて、又曾丹の方では序の歌として春十には一首多く十一首あったがそのようなこともなく、ここまでに二首の違いが生じ、順の百首は文字通り百首になるように手が加えてある。次に「これはあさかやまなにはづ」と詞書して三十一首の沓冠の歌が続き、後の部分も曾丹の百首和歌と同様に、十二、一日・一よめぐり、八方めぐりの歌と続き、計百首となっている。

明らかに源順の百首は曾丹のそれに応答したものであって、組織が同様である。源順の「返し志たりとなむ」というその返しの内容は当然返すべきその対象を意識してそれを反映し相応じているとみるのが自然である。然るに、その順の返しは百首和歌しかなく、後には後世の人が補なったような書き出し「このほか好忠が歌ことばあり」と題して三首が載せてあるだけで、そこで曾丹集は終わっている。

とにかく、源順の返しは曾丹の百首和歌に対する返しにしかなっていない。即ち百首和歌の返しの百首でしかない。だから「源順これを見て返し志たりとなむ」の「これ」は曾丹の百首和歌だけだといえよう。したがってつらね歌は含んでいないと考えたい。順が見たのは曾丹の百首和歌だけである。

三

ここでもっと重要なのは、源順の生涯、ことに彼の生歿年と、「円融院のおほん子の日の日召なくて参りたりとてさいなまれて」といった事件の起った日との、時間的関係を見ていくことだと考える。即ち源順がこの子の日に関するつらね歌を見ることができたであろうかということである。

源順は、嵯峨天皇の後裔である源挙の子として延喜一一（九一一）年に生れ、永観元（九八三）年に七十三才で歿している。

次に「円融院のおほん子日の日」がいつだったかということが問題になる。

まず子の日とはいかなる日だったかということになるが、それは十二支の子に当る日で、正月の初めの子日に、人々が野に出て小松を根引きにし、若菜を摘み、又宴をもうけ和歌を詠じたりして長寿延命の祝としたものらしい。そして根延の意に寄せてこの日を祝うのであろうかと思われる。

又円融院なる言葉にも注目しなくてはならない。元来は建物の称だが、ここでは上皇の代名詞として使われているように察せられる。河出書房刊『日本歴史大辞典』の記述を引くと、円融院は「もと京都市右京区竜安寺の側に在り、また円融寺とも称した。円融天皇の御願寺で、七仏薬師像を安置し、九八三（永観元）年落慶、九八六（寛和二）年円融法皇は堀河院からここに移り、のち一条天皇は二回にわたって当寺に行幸した。九九一（正暦二）年二月法皇崩御、当時の北原に葬る。…」云々とある。源順の死去した年に、円融院が落慶している。

又その円融寺を勅願された円融天皇は、第六四代（在位九六九―九八四）の天皇で、九五九（天徳三）年三月に、村上天皇を父、皇后藤原安子を母、として誕生、名は守平、九六九（安和二）年八月十三日即位、在位十五年改元五、九八四（永観二）八月二七日位を花山天皇に譲り、九八五（永観三）年二月一三日上皇として紫野で子日の遊びをし、九八五（寛和元）年（四月二七日永観から寛和に改元）八月二九日剃髪・出家し、同年九月一九日法皇として円融院に帰り、九八六（寛和二）年一〇月一〇日大井河に三船の遊びを行ない、在院七年で歿しているお方である。

以上のことから、曾丹がさいなまれた子の日は、九八四（永観二）年以後となる。

しかも曾丹がさいなまれたというような事実に該当する記録、換言すると守平が子の日の遊びに関連して歌人を召したという記録は

九八五（永観三）年二月一三日に円融上皇が紫野で子日の遊びをした時のこと以外にはみあたらない。その記録というのは、後小野宮右大臣実資の『小右記』の永観三年二月十三日の条及び『大鏡裏書』の紫野子日事の条（権左中弁従四位下なる人の日記の抄出）であり、更に『日本紀略』後篇八・花山天皇・寛和元年二月十三日の条、『百錬抄』第四・花山天皇・寛和の条、『扶桑略記』第廿七、『続本朝通鑑』巻十六もあり、その他『小野宮右府記』を参照したとする『古事談』第一・王道后宮があり、『大鏡』『今昔物語』『兼盛集』『元輔集』などもあげうる。

もちろん記述がないから事実もなかったということにはならない、が民間で催す行事とは違って、朝廷で、あるいは院が、というように公で行なわれる子日宴であれば、なにかの形でその記述がみられるものと信じたい。然るに永観三年二月一三日以外には、曾丹がさいなまれたと詠じている子の日に該当するものは見当らない。

事実、天祿・天元前後にはひどい飢饉があいついで起り、天元年間に内裏が二度にもわたって焼けており、現在の感覚で考えた場合、とても永観以前に子日の遊びを公にしたとは思われない。だから曾丹及び円融院に関連する子の日の記事が永観三年二月一三日の子の日についてしかみえないということは、そのような世の中を反映してこの他には行なわれていないと考えてそう不都合はないと考える。

それでは何故永観三年二月一三日にあんなにまで、はでに？　子日宴が催されたのであろうか。円融天皇は、九八四（永観二）年八月二七日位を花山天皇に譲り、上皇になれ、更に九八五（寛和元）年八月二九日に剃髪・出家しておられる。だから九八五（永観三）年二月一三日に行なわれた子の日の祝は、円融上皇が出家される直前の、しかも上皇としては最後の公の行事であるとともに、剃髪・出家されるということを予想・考慮しての宴だったとも考えられる。それでそういった事情を反映して相当はでに行なわれたので、史料も多く伝わっており、更にはそのようなことから曾丹がつらね歌によまざるをえないような事件も起ったのだと想像する。

そして『小右記』『大鏡裏書』にみえる内容を検討すると、その日と曾丹のよんでいる円融院のおほん子日の日とは全く合致する。即ち曾丹がさいなまれた子の日は、永観三年二月一三日だということになる。

ということは、まわりくどい説明になったが、源順これを見て返し忘たりとなむに始まる源順の返しは、曾丹の百首に対する返しであって、曾丹が円融院のおほん子日の日召なくて参りたりとてさいなまれたことを同情しての、あるいはその翌日奉ったというつらね歌に対しての、返しではないことになる。

なぜなら源順は九八三（永観元）年に七三才でなくなっており、曾丹がさいなまれたのはそれから二年のちの九八五（永観三）年二月一三日だからである。

四

したがって円融院のおほん子日の日三々の詞書に始まるつらね歌は、本来なら今のようなところにはいるべきではないものといえる。又このような配列になっていることは、流布本曾丹集の成立時期の問題ともかかわってくる。

どこまでも想像に過ぎないが、円融院のおほん子日の日召なくてまゐりたりとてさいなまれて又の日奉りけるの詞書に初まるつらね歌は現在曾丹集にみえるような形であったのではなく、あるいは現在伝わっているような配列になっていたのではなく、原曾丹集というものがあったとすれば、たぶん毎月集の部分だけだったのではないか。あるいはそれに当時流行の先端をいくものとしてもてはやされていた曾丹の百首和歌が既に付け加えられ

ていたかもしれない。大きく譲っても、曾丹の百首和歌で終わっていたであろう。

それから少し時間を経て、原曾丹集に源順の百首がそえられ、更にその後にこの二つの百首歌の間に、円融院のおほん子日の日云々のつらね歌がはさまれたのであろうか。その場合、池田博士の想像に似た認識の上にたって、曾丹と源順の両百首和歌をつなぐものとしてつらね歌をはさんだのか、あるいは時代が大分下ったために前後の識別が困難になった頃、不鮮明になった時、時間的関係についての認識を欠いた人、あるいはそれについて無意識な人が、ただ単に無意識のうちにはさんだ挿入かもしれない。

あるいは続国歌大観番号の二二五一四番から始まる四首のつらね歌までが原曾丹集にあって、すなわち四首のつらね歌が原曾丹集の最後についていたとして、それに源順の百首和歌が加わり、それに子の日のつらね歌が、同じつらね歌だという類似感から今の位置にはさまれたのでもあろうか。それとも源順の返しの序にみえる与謝の海の天の橋立ということばが、曾丹の百首和歌の序及び歌の中の言葉をふまえている事実に眼をつぶり、単に曾丹の子の日に関するつらね歌の第一・第二の歌に天の橋立という言葉だけに着目して、源順がこの句をふまえて返しの序を書いたのであろうとし、それに同情でもしないと、曾丹なんかに返しの百首和歌なんか贈りはしないだろうとでも想像して子の日に関するつらね歌を二つの百首歌の間にはさんだのであろうか。

それとも曾丹の百首和歌と源順の返しの百首和歌とが対になって、それだけで独立して世にもてはやされていたのを、原曾丹集の後に付け加えて現在伝わる曾丹集にみられるように掲載する際に、例のつらね歌をはさんだのか。あるいは更に時が経ってこの二つの百首和歌の結びつきが薄く感じられるようになった時期に、この両百首をより結びつけようとする意図で、やはり前述したような認識の上にたってはさんだのでもあろうか。

とにかく、これらのものはそれぞれ時間的間隔をもって、つけそえられていき、円融院のおほん子日の日召なくて参りたりとてさいなまれて又の日参りけるといった詞書に始まるつらね歌が流布本曾丹集につけそえられたのは、相当後のことであろうと思われる。

それは曾丹集の最後の部分にあるこのほか好忠が歌ことばありに始まる三首（これは玄々集・拾遺和歌集などの歌集から採ったものであろう）の置き様によっても、このことがうかがえる。

勿論、流布本曾丹集の最初の部分の毎月集・三百六十首の成立の比較的早いことは、早川幾忠氏が大正十五年一月の『国語と国文学』において述べておられる通り、拾遺集などに、既に「三百六十首の中に」と題して歌の載せられていることからもいえるわけだろうが、少なくとも後半の歌集の乱れを考えると、現在伝わっているような形での曾丹集が出来上ったのは、順の死及び事件の起った日の前後関係があいまいになっている程度に比例して、相当後のことであろうと想像される。

五

この曾丹のつらね歌の性格及び背景をはっきりさせることにより、より一層正確に源順の百首歌も理解できるだろうし、このつらね歌及びこの背景をより正しく理解することによっても、曾禰好忠の性格も、即ち今昔物語の記述から解放され偏見のない眼で見た曾丹の性格も、歌人としても位置も、評価も少しははっきりし、正されるであろうと思って、こんな作業をしたわけである。

また曾丹のように、歌集以外に彼を知ることのできる資料のほとんどないものについて考察していく場合、特定のある一日の出来事ではあっても、この永観三年二月一三日の事件は貴重なもので、これを足がかりにしていくよりほかに方法はないと思う。

（本学学生三年）